

5/21 Fri.

第608回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 608 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

下野竜也 -p.4
TATSUYA SHIMONO
藤田真央 -p.5
MAO FUJITA
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

マルティヌー
MARTINU

過ぎ去った夢 H. 124 [約12分] -p.6
Dream of the Past, H. 124

モーツァルト
MOZART

ピアノ協奏曲 第21番 ハ長調 K. 467 [約26分] -p.7
Piano Concerto No. 21 in C major, K. 467
I. Allegro
II. Andante
III. Allegro vivace assai

[休憩]
[Intermission]

マルティヌー
MARTINU

交響曲 第3番 H. 299 [約30分] -p.8
Symphony No. 3, H. 299
I. Allegro poco moderato
II. Largo
III. Allegro - Andante

※当初の発表から出演者が一部変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

5/25 Tue.

第642回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 642 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

下野竜也 -p.4
TATSUYA SHIMONO
藤田真央 -p.5
MAO FUJITA
長原幸太
KOTA NAGAHARA

バーバー
BARBER

序曲〈悪口学校〉 作品5 [約8分] -p.10
Overture "The School for Scandal", op. 5

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18 [約33分] -p.11
Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18
I. Moderato
II. Adagio sostenuto
III. Allegro scherzando

[休憩]
[Intermission]

ハンナ・ケンドール
HANNAH KENDALL

スパーク・キャッチャーズ（日本初演） [約10分] -p.12
The Spark Catchers (Japan premiere)

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

バレエ組曲〈火の鳥〉（1919年版） [約23分] -p.13
The Firebird Suite (1919 version)
I. 序奏
II. 火の鳥の踊り
III. 火の鳥のヴァリアシオン
IV. 王女たちの Rond
V. 魔王カステイの凶悪な踊り
VI. 子守歌
VII. 終曲

※当初の発表から出演者が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

5/21
定期5/25
名曲

Maestro

指揮

下野竜也

TATSUYA SHIMONO, Conductor

名コンビが繰り広げる
多彩なプログラム

©読響

数々の名演を築き上げてきた前首席客演指揮者が、約1年4か月ぶりに読響主催公演に登場。マルティヌーの作品に光を当てその魅力に迫るほか、ストラヴィンスキー〈火の鳥〉では鮮烈なリズムとサウンドを生み出す。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり、朝比奈隆ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研究員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、ローマ・サンタ・チェチーリア国立アカデミー管などと共演し、国際的に活躍している。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。06年から読響の正指揮者、13年から17年3月までは首席客演指揮者として多大な功績を残した。14年9月にはカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉を日本初演し、読響をミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。また、14年から京都市響常任客演指揮者、17年から20年3月まで同常任首席客演指揮者を務めた。17年4月から広島響の音楽総監督を務めるほか、広島ウインドオーケストラ音楽監督、京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻教授、東京音楽大学吹奏楽アカデミー特任教授などの任にある。



©EIIICHI IKEDA

ピアノ

藤田真央

MAO FUJITA, Piano

2019年のチャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞。審査員や聴衆から熱狂的に支持され、ネット配信を通じて世界的に注目された気鋭。1998年東京生まれ。東京音楽大学卒業。2017年、クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。これまでに、ゲルギエフ、ワシリー・ペトレンコ、カエターニ、小林研一郎、山田和樹、カーチュン・ウォンらの指揮で、マリインスキー歌劇場管、ミュンヘン・フィル、ユタ響、ローザンヌ室内管、N響、東京都響などと共演。20年7月には、オンラインで開催されたヴェルビエ音楽祭に参加した。今春から、3年5回にわたる「モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会」をスタートした。20年にホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞を受賞。読響とは今年1月のヴァイグレ指揮《名曲シリーズ》以来、3度目の共演となる。

5/21
定期5/25
名曲

Artist

マルティヌー

過ぎ去った夢 H.124

ボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）は、チェコ中部のポリチカ生まれ。父親は火事の見張り番で、家は物見塔を兼ねる教会の鐘楼^{しやうろう}だった。「タワーマンション」ではなく「タワー」そのものに暮らす一家だった。住まいと表を往復するには、193段もの階段を上り下りしなければならない。時間ともなれば家中に鐘の音が鳴り響く。そんな環境でマルティヌーは育った。

近所の仕立て屋にヴァイオリンを習う。10歳にして独学で作曲を始める。村ではそれが限界だったが、1906年には首都のプラハ音楽院に入学した。ヴァイオリン科に在籍するも、作曲ばかりしていたため「怠け者」のレッテルを貼られ、退学処分になった。それをむしろ好機と捉え、曲づくりに本格的に取り組む。その後、故郷で音楽教師をしたり、プラハでチェコ・フィルハーモニー管弦楽団のヴァイオリン奏者として働いたりした。

ここまでがマルティヌーの前半生（後半生はp.8の交響曲第3番の解説にて）。管弦楽曲〈過ぎ去った夢〉は、この前期の作品のひとつだ。作曲は1920年、ちょうどチェコ・フィルでヴァイオリンを弾いていたころ。演奏旅行先のパリでフランス印象派の音楽を知り、「ドビュッシーのように作曲したい」という思いを抱くようになっていた。

〈過ぎ去った夢〉は実際に、ドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉とよく似ている。冒頭、完全4度・5度音程の下行音型のあと、フルートがその音程と半音気味のメロディーラインとを対比する。このフルートの使い方は〈牧神〜〉からヒントを得たものだろう。表面をなでるような（しかし手の込んだ楽器法の）弦楽器群に、洒落た（というより癖の強い）管打楽器群が寄り添ったり離れたりするのは、ドビュッシーの筆づかいに確かに近い。

なお、作曲家はもともとこの作品を、管弦楽曲〈サテュロスの木立〉の中心楽章として構想していた。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1920年／初演：不詳／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、サスペンデッド・シンバル）、ハープ、弦五部

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第21番 八長調 K.467

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）はピアノ協奏曲第21番K.467を、1785年3月に書き上げた。

この作曲家のピアノ協奏曲は、1784年3月に大きな転換点を迎えている。それは「通奏低音の解体」を指す。17世紀以来、低声部はひとまとまりの通奏低音として取り扱われていた。その一群からファゴットを分離。チェロとコントラバスも別々のパートとし、声部を増やす。それにより低声部の一体性は弱まったが、一方でよりきめ細やかなベースラインを実現した。

低音をめぐる話題でもうひとつ興味深いのは、ペダル・クラヴィーアのこと。当時のブルク劇場の広告には「（演奏者は）即興演奏で、とりわけ大型のピアノ用ペダルを使います」（1785年3月の演奏会用）と告知されている。モーツァルトはピアノ本体の下に平置きするタイプの、巨大な足弾きピアノを演奏会で用い、素晴らしい低音効果を発揮させたい。

低声部の下限を（ペダル・クラヴィーアで）強化し、その低声部を分割してパート数を増やし、細やかな楽想を実現する。それを短調作品として彫琢^{ちやうたく}すると第20番二短調となり、長調作品として造形すると第21番八長調となる。

作曲家は**第1楽章**で、^{とつとつ}訥々とした分散和音と滑らかに下行する音階とを組み合わせ、それを第1主題とする。それを楽章中、何度も登場させ、ときにはそれをポリフォニックに扱う。これは第18番（第1楽章第1主題の重視）と第19番（対位法の援用）の試みを統合したもの。**第2楽章**のテーマもこの路線（分散和音+下行音階）を踏襲する。一方、分散和音と下行音階の対比を突き抜けて、狭い音域をうねりながら、前に前に、と進んでいくのが**第3楽章**だ。

より細やかに声部をやりくりすることでモーツァルトは、こうした楽想の結合と対比とを高度に実現する。それによりこの曲は、シンフォニーといってもよいほどの交響性を持つにいった。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1785年3月9日／初演：1785年3月10日、ウィーン・ブルク劇場／演奏時間：約26分

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

マルティヌー 交響曲 第3番 H.299

マルティヌーは1923年の秋から17年間、パリを拠点とした。ここで仏音楽界の大立者ルーセルに師事し、作曲の実力を大いに伸ばした。加えて、師の紹介によりパリの楽壇にマルティヌーの名前が知れ渡る。

作曲家はパリでたくさんの作品を生んだ。とりわけ10作のオペラ（ラジオ・映画向けを含む）が目を引く。〈兵士と踊り子〉の成功を皮切りに、次々と大規模音楽作品に取り組んだ。そのうち、シュル・レアリスム（超現実主義）に共感を示した〈ジュリエッタ〉は、この時期の代表作だ。

興味深いのはパリに来てから、チェコ時代あれほど憧れていた印象主義に見向きもなくなったこと。この街で彼の心を捉えたのはジャズやラグタイム、イタリア・バロック音楽、超現実主義など。そこから新しい刺激を受けてはすぐに作品に反映させる。作曲家にとって世界はつねに新しく、その新しさがマルティヌーをまねに見る多作家にした。

充実した活動に暗雲が立ち込めるようになったのは1940年前後。38年から39年にかけてドイツがチェコスロヴァキアをじりじりと追い詰め、最終的に解体し事実上、併合してしまった。マルティヌー夫妻はあるとき、ナチスのブラックリストに自分たちの名前が掲載されたことを知る。40年6月10日、ふたりは着の身着のままパリを離れ、41年3月31日、やっとの思いでニューヨークに到着した。

新大陸で作曲家を助けたのは、セルゲイ・クーセヴィツキーだ。この指揮者は1930年代初めにすでに、マルティヌーの作品をボストン交響楽団のレパートリーに加えている。また自身、白系ロシア人として亡命を余儀なくされた身の上であり、境遇を同じくする作曲家に対して同情の念も強い。

クーセヴィツキーはマルティヌーに交響曲を委嘱した。作曲家は1942年にこれを仕上げた。以後、毎年1曲ずつ交響曲を書く計画に着手する。マルティヌーは実際、46年の第5番まで堅実に1年1作のペースを守った。ところが、不幸な事故がその歩みを妨げる。46年7月、宿のバルコニーから転落して重傷を負い、以後、後遺症に悩まされた。

マルティヌーは回復におおむね5年を費やす。復帰を確かなものとしたのが、ボ

ストン響75周年のために書いた交響曲第6番〈交響的幻想曲〉だ。アメリカでの最後の時間をこの作品に使い、9割がた書き上げ、1953年に移住先のニースで完成させた。

この作曲家の交響曲は全部で6曲。そのいずれも、マルティヌーがアメリカでの活動の中で生み出したものだった。そのうち交響曲第3番は、事故前の計画的なシンフォニー創作の一角を占める作品だ。この計画が少なくとも不幸な事故まで続いたのは、作曲が委嘱や支援と結びついて、確かな社会的位置を占めていたから。事故後の第6番同様、事故前の第1番から第5番にもすべて、楽団や支援者の依頼があった。

当の第3番は、クーセヴィツキーのボストン交響楽団常任指揮者就任20周年を記念するための委嘱作品。第二次大戦中の1944年という作曲年のせい、周年行事の華やかさはなく、むしろ戦時下の悲痛な叫びを思わせる音調が目立つ。

第1楽章では種となる小さな動機を繰り返しつつ、それを増殖・変形・堆積させていく。どこかショスタコーヴィチを彷彿とさせる筆さばき。それだけでは一本調子になってしまうので、それを管弦楽法、たとえばファゴットから、イングリッシュ・ホルンとトランペットの組へと音型を受け渡したりするような工夫で、作品を彩る。ここにはフランス音楽との親和性が見られる。

第2楽章も同様の手法を用いる。チャイコフスキーの第5交響曲の第1楽章序奏主題の引用「ミーファーレミドー（階名唱）」で聴き手の耳を引く。

終楽章は多主題のソナタ形式といったところか。要は楽想がころころと変わり、あるとき最初の主題が改めて顔を出す、といった体裁をとる。作曲家はコーダに、ドヴォルザークの〈レクイエム〉冒頭を引用する。その冒頭も、バッハの〈口短調ミサ曲〉第3曲「キリエ」からの転用である。
〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1944年／初演：1945年10月12日、アメリカ・ボストン、クーセヴィツキー指揮ボストン交響楽団
／演奏時間：約30分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、銅鑼）、ハープ、ピアノ、弦五部

バーバー

序曲〈悪口学校〉 作品5

〈弦楽のためのアダージョ〉で知られるアメリカの作曲家、サミュエル・バーバー(1910～81)が最初に書いたオーケストラ作品が序曲〈悪口学校〉である。バーバーは14歳よりフィラデルフィアのカーティス音楽院で本格的な音楽教育を受け、作曲、指揮、ピアノ、声楽を学んだ。一時はバリトン歌手として身を立てようと考えるほど歌唱の才能を示したが、音楽院の8年間でバーバーは作曲技術を磨き、1931年、卒業にあたり序曲〈悪口学校〉を作曲した。作品はアレクサンダー・スモーレンス指揮フィラデルフィア管弦楽団により初演され、アメリカの若い作曲家に与えられるバーズ賞を受賞して、バーバーの名を広く知らしめた。

〈悪口学校〉は18世紀後半を代表するイギリスの劇作家リチャード・シェリダンによる風習喜劇。ここでの「悪口」とはスキャンダルを指す。劇の前口上で「悪口学校! そんな当世流行りの芸を教える学校などなくとも、通の皆さんには今さらレッスンなど必要ないでしょう」と述べられた後、噂話や陰口が飛び交う上流社会の人々が風刺的に描かれる。主要登場人物は対照的な性格を持った兄弟。兄は道德家として評判がよいがその内心は腹黒く、弟は借金漬けの放蕩三昧(ほうとうさんまい)で不評を買っているが心根はやさしい。財産家の叔父はふたりの真実の姿を知るために計略を企てる……といった物語が展開される。

バーバーの序曲は劇音楽として作曲されたわけではないが、シェリダンの戯曲のムードをよく伝えている。冒頭の賑々しいオープニングは劇の前口上そのもの。ヴァイオリンによる気取った主題は登場人物の虚栄心の反映、続くオーボエによる牧歌的な主題は誠実さの表現と解せるだろう。木管楽器によるペチャクチャとしゃべるような細かいパッセージは、まるで乱れ飛ぶ流言飛語のよう。リヒャルト・シュトラウスの交響詩を思わせるストーリーテリングの巧みさが光る。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1931年／初演：1933年8月30日、フィラデルフィア／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール)、ハープ、チェレスタ、弦五部

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 八短調 作品18

セルгей・ラフマニノフ(1873～1943)はロシアで生まれ、後にアメリカに渡った作曲家、ピアニスト。ピアノ協奏曲第2番はラフマニノフの代表作であるばかりでなく、古今のピアノ協奏曲のなかでもっとも人気の高い作品のひとつとなっている。ラフマニノフ本人が卓越したピアニストだったこともあり、全編にわたって独奏ピアノが華麗な技巧を披露する。甘美で叙情的な旋律に富み、フランク・シナトラの〈I Think Of You〉をはじめポピュラー音楽でのカバーも多く、フィギュアスケートや、TVアニメ「FAIRY TAIL」などBGMでの活用例も目立つ。

作曲は1900年から01年にかけて、27歳でこの作品に取り組んだラフマニノフだが、この曲の誕生以前に深刻な創作活動の危機を迎えていた。1897年、満を持して発表した交響曲第1番の初演が大失敗に終わり、手厳しい酷評が浴びせられた。ラフマニノフは挫折から立ち直れないまま、以後約3年間にわたりほとんど作品を発表できなくなってしまう。しかし、音楽に造詣の深い精神科医ニコライ・ダーリによる催眠療法をきっかけに自信と創作意欲を回復し、ピアノ協奏曲第2番の作曲に挑む。1901年、自身の独奏による初演は大成功を収め、作曲家ラフマニノフの名は一躍世に知られることになった。作品は恩人であるダーリに献呈されている。

第1楽章 モデラート 冒頭の厳粛な序奏は故郷のロシア正教の鐘を模している。哀愁を帯びた楽想がくりだされ、雄大なロマンティシズムにあふれる。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート 瞑想にふけるかのようなピアノ独奏と、管弦楽の柔和な響きが、豊かな陰影を描き出す。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド 舞曲風の活発な主題で開始される。華やかな独奏と力強い管弦楽が一体となって、輝かしい頂点へと突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1900～01年／初演：1901年10月27日(露暦)、モスクワ／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

ハンナ・ケンドール スパーク・キャッチャーズ (日本初演)

ハンナ・ケンドール (1984～) はロンドン出身で、現在はニューヨークを拠点に活動する作曲家。南米ガイアナ系移民の両親のもとに生まれ、ジャズ・ミュージシャンであった祖父の影響もあり、音楽やバレエ、演劇など広く芸術全般に親しむ家庭環境に育った。エクセター大学で声楽と作曲を、ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックで作曲を学ぶ。すでに管弦楽曲、室内楽曲、オペラなど多数の作品を発表しており、2015年にはBBCラジオ3の「コンポーザー・オブ・ザ・ウィーク」に選ばれ、同年「ウーマン・オブ・ザ・フューチャー・アワード」の芸術文化部門を受賞して脚光を浴びた。

〈スパーク・キャッチャーズ〉はBBCラジオ3より委嘱され、2017年のBBCプロムスでケヴィン・ジョン・エデュセイ指揮「チネケ!」オーケストラにより初演された。「チネケ!」(イボ語で「神」を意味する)とは、エスニック・マイノリティにより結成されたイギリス初のプロ・オーケストラで、この公演では出演者と作曲家の両面で、イギリスのクラシック音楽界における民族的多様性に焦点が当てられていた。

〈スパーク・キャッチャーズ〉の題は、エチオピア系イギリス人の詩人レム・シセイによる同名の詩に由来する。詩は2012年のロンドン・オリンピックのために書かれ、19世紀のマッチ工場で過酷な労働環境に置かれた少女労働者たちによる抗議活動が讃えられている。曲は不規則に火花が散る様子を思わせるリズムカルで活発な冒頭部分で始まり、プラスセクションの重々しい響きが緊迫感を高めた後、星空のきらめきを表す透明感のある静謐な部分が続く。やがてふたたび閃光を連続させる活気のある楽想が現れ、「マッチ工場の少女たちの行進」と記された力強く決然とした終結部に至る。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：2017年／初演：2017年8月30日、ロンドン、BBCプロムス／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、打楽器(トライアングル、シンバル、タンブリン、グロッケンシュピール)、ハープ、弦五部

ストラヴィンスキー バレエ組曲〈火の鳥〉(1919年版)

1909年、当時パリを席卷していたロシア・バレエ団を率いるディアギレフは、翌年のオペラ座公演のためにイゴール・ストラヴィンスキー(1882～1971)にバレエ〈火の鳥〉の作曲を委嘱した。ストラヴィンスキーはまだ20代の新進作曲家にすぎなかったが、すでに交響的幻想曲〈花火〉を聴いていたディアギレフはこの若い才能を抜擢することに決めた。ストラヴィンスキーは作曲の期限が定められていることや、大家たちと名を並べることに重圧を感じながらも、強い熱意をもって作品に取り組んだ。

バレエ〈火の鳥〉は初演から大きな成功を収め、ストラヴィンスキーは一躍時の人となった。コンサートでも上演できるようすぐに組曲(1911年版)が用意された。しかし、第一次世界大戦による混乱から、4管編成の大編成で書かれた〈火の鳥〉の演奏は困難になってしまう。そこで、ストラヴィンスキーは2管編成用ながらも高い演奏効果を持つ新たな組曲(1919年版)を作りあげた。後に1945年にも組曲が作られているが、現在もっともよく演奏されるのは、この1919年版である。

物語は複数のロシア民話を組み合わせて作られた。イワン王子は伝説の火の鳥を捕らえるが、不思議な力を持った羽根をもらうことと引きかえに火の鳥を逃がす。王子は魔王カステイに捕らわれていた王女と恋に落ちる。魔王は王子を石に変えようとするが、王子は火の鳥の力を借りて魔王を倒し、王女と結ばれる。

不吉な気配を漂わせる「序奏」で開始され、羽ばたくような「火の鳥の踊り」「火の鳥のヴァリアシオン」が続く。高雅な「王女たちのロンド」(ホロヴォード舞曲)、荒々しい「魔王カステイの凶悪な踊り」、優美な「子守歌」を経て、輝かしい「終曲」で曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1909～10年、1919年(組曲)／初演：1910年6月25日、パリ・オペラ座(バレエ)／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部